



東京素描



白久 葵

ゆめの岸辺

君を待つ 針の霧雨 やわらかに

ゆめ覚めて つき冴え冴えと 耳すまし

4月、ちょうど恋人と心が離れていった。

辛いはずの時期に、私は仕事上のよい出会いで知らずと心を支えられて、乗り越えられたと思う。

なぜだか、その頃、よく夢を見た。

夢の中で私はどこかの集合住宅のようなところに住んでいて、そこには今の職場の人たちが、知っている顔から知らない顔まで共に暮らしていた。

そこは住みにくいようで、また居心地がよくもあった。

そして、夢の中で私は、よく恋をした。

目が覚めて、よっぽど私は欲求不満なんだろうな、と悲しくおかしく思った。

でも、現実の世界はけっこう辛く、夢の中の甘い匂いは心地よかった。

そんなある夜、夢を見た。

私の夢は決まって短い。ストーリーもほとんどないけど、風景や色や感覚が、一刻分、とても強烈に頭の芯に残る。

たとえば雨上がりの重い空と、湿ったコンクリートに光る、もうひとつの空。

雨の気配。川越あたりの延々と広がる青田が、いつまでもいつまでも、雨にしおんでいる様子。

.....その日の夢は、人の肌の愛おしさや温かさが、強く体に残った。

いつものように朝がくればかき消され、消えていく感覚ならば、それを恋とは思わなかっただ

ろう。静かに始まって、汐の満ち引きのように、時に強く苦しく、時に緩やかに甘く、想う。

片思いをしたのは20歳の頃以来で、その時と同じように、26歳の私は、気持ちを自分の内に閉ざして、ただその想いをじっと感じているだけ。何も変わらない自分が少しおかしかった。

夢の中には当時の恋人も、時折現れた。

その夢でその人はやさしかったけど、決して体が結ばれない、という夢。

結局、彼とはそこからは長くは続けてゆけず、私たちは別々に暮らすことになった。

引越しの一週間前から、彼は家に戻らなかった。

シビアな想いを抱きながらの引越しになってしまった。寂々とした気持ちで、若葉の家を出た。

秋のさくらの木の枝は、小さな葉を黄色に染め上げて、肌にしんとさす風にちらちらと揺れた。

家というものは時に、その印象が心に強く迫ることがある。

荷物をまとめる手を、ふと止めて思った。

私たちがお互いの気持ちを打ち明けたのもこの部屋だった。

ある時、実家から帰ってくると部屋には南の島の恋のお守り、ボージョボー人形が飾っていて、そして彼が帰ってこなくなった。

私の知らない誰かの想いを背負って、ボージョボーが私たちを引き裂いたのかな、なんて思った。

むしろ彼のことで悩まなくていいことに安心してでもいいのかもしれない。

南の島のボージョボーに、よろしくと伝えて家を出た。恋のお守りが本当なら、彼は私の知らない誰かと結ばれることになる。

この家から私たちの全てが始まって、この家で全て失った。

恋というのは、いつも短い。たいてい生活の方が飲み込んでしまう。

あなたと出会って別れるより、ずっと前から好きな曲。好きな小説。好きな映画。

誰かと別れる度に、そんなことを支えにした。

一人の自分に戻るだけだと。彼は私の人生にとびらを開けて入ってきて、そして出て行った。

私はいつもの音楽を聴いて、じゃあまたねととびらを閉める。

新しい家に入ったときも、胸が締め付けられるような思いに、一瞬、とらわれた。

東京での一人暮らし。これが私が半年間ほとんど仕事を休まず資金を貯めて、手に入れた全てのものだった。

そこにはあの人の姿はない。寂寥感に立ちすくんでしまいそうな、がらんとした冬の部屋の冷たさだけが、そこにあった。

冬くれて 流れあらわる 夕灯り ここがわが街ぞ 車窓立ち見つ

ガラス玉 なめてひやりと 秋のしずやか

さて、とめどない夢から覚めた私に残ったものは、あの人ではなく、夢の片鱗だった。

さくらの葉がひらひらと手をふる並木道で、後ろを振り返らないように、バス停へ歩いた。

駅からバスで10分、タクシーだと深夜1600円かかるほど郊外にあるこの土地で、季節を一巡して育んだ記憶は、まだ重い。

その濃密な空間で、ただ一筋の支えにした想いは、明け方にひらめく幾つもの夢のひとつから育

って、次第に確かな光になっている。

それを恋愛と呼ぶには、まだ戸惑いがあるけれど。

夢は人になにかを告げるという、ある高名な心理学者の話。

夢におされてここへ来たのか、ここへ来ることを示していただけなのかな。

人の行く先は広大な流れに委ねられている。その流れの中で、空を見上げると、濁った空の日もあれば、秋の空のように澄んで美しい空の日もある。

恋愛の始まりに運命だなんていうと、笑ってしまう年齢になってしまったけれど、帰宅の電車から、遠い空がまだ明るい、夕方の住宅街が過ぎ去っていくのを見ていたら、この想いを運命と呼んでしまってもいい気がした。

いつか結ばれなくても、この不思議な出会いが、水面の一石みたいに、大きく広がる波紋を呼んで、凍りついた時間が流れはじめるように。そんな運命もあるのだと思う。

ぼんやりした夢の記憶が現実と寄り添って、力を得ていくのを見る気がして、すこし気持ちが晴れた。

東京素描

<http://p.booklog.jp/book/78410>

著者：白久 葵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mventura/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78410>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78410>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ